

「フイットア領移事件」  
シーローン王国に転移した  
私「リーリヤ・グレイラット」と  
その娘「アイシャ・グレイラット」

二人はシーローン王国の  
兵士にいわれのない  
スパイ容疑をかけられ  
囚われの身となっていました。

「本当です！  
光に飲み込まれて  
気が付いたら  
フイットア領から  
ここに……」

彼らは私たちの  
言うことを全く  
信じてくれませんでした  
それどころか……

「またそれか……  
ここからどれだけ  
離れてると思ってるんだ」

「しゃべりたく  
ねえならそれでいい」

「それならよお」

「お母さん……」

「ならいつまで  
調査しねえとなあ」

「は……」

私たちが慰み者に  
しようとしてきたのです

「体に聞くじかねえよなあっ！」

「きゃあああああっ！」

「なんだあこの  
でっけえ乳は」

「あ……あああ……」

「とんでもねえ  
凶器じゃねえか、  
下の方にも何か  
隠し持ってる  
かもしれねえ」

「ぬん」

「待って、娘の前で  
それだけは……」



「お前らが拒否することが  
できると思ってるのが！」

「安心しろ、奥の奥まで  
しっかり調べてやる！」

「うおおお締まる…っ!!」

「オラのー！」  
「あ…ささ吐け！」

「ああ…  
痛いっ!!」

「いやあああっ!!」

「やめてっー！」

「本当なんです！  
信じてくださいー！」

「へへ、こいつあ  
絶対なんか隠してるぜ」

「なんせ根元まで加えこんで  
離さねえんだからよお！」

「あ…あああああっ!!」

私は彼らに  
訴え続けました



それでも…彼らは…

「う…っ  
もう出そうだ…っ!!」

「…っ!!待てっ!!  
中は…腔内だけほっ!!」

「うるせえ、こんな危ねえ  
マシユ隠し持ちやがって  
もうスパイ確定なんだよ！」

「そんなっ!!」

「これは罰なんだよ！  
この罪人があつ!!」

「出さないでえっ!!」

「ダメ  
ダメダメ」

「孕めっ!!!」

私の膣中に  
その欲望を  
吐き出したのです

おぞましい量の子種は  
私の子宮内で暴れ回り

私は名前も知らない兵士  
に孕まされそうになっている  
恐怖にただ、耐えるしか  
ありませんでした

「へっへっへ」  
中々の名器だったぜ

「もう…気は…  
済んだでしょう？  
私たちを…  
解放してください……」

「何言ってるんだ？」

「お前には  
ここにいる奴  
全員の相手をして  
もらうんだよ」

「あ……そ……そんな……  
いや……いやあ……」



「オア、こつちもしやぶれー！」

「歯建てたら、  
タダじゃ置かねえぞ!!」

女の私には  
群がってくる  
男たちを押しつける  
力は無く

その猛り狂った男根を  
私の穴という穴に  
突き入れ始めました

容赦のない  
暴力的な攻めと

全身いたる所に  
吐き出される子種…

でも、所詮私は女…

痛みは次第に  
快楽に変わり…

私は望まない  
絶頂を何度も  
味わうことに  
なるのです



立て続けに絶頂した私は、  
だらしなく広げられた股を  
閉じる体力も残ってないほど  
消耗していました

「なんだ、  
まだ二周もしてねえのに  
もうへばったのか？」

「だらしのねえ母親だなあ」

「罪人のくせに  
とんだ淫乱女だな」

「罪人ならもう  
一人いるだろう」

彼らの毒牙は…

「罰はよお」

増え続ける男たちの  
欲望は私だけでは  
受け止めることができません…

「おい、どうする？  
これじゃいつまで  
たっても終わらねえぞ」

「当然、親子揃って  
受けてもらわなきゃ  
だよなあ？」

娘のアイシャにも  
向こうと  
していたのです…

to be continued…<